
ソラトモ

弘悦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソラトモ

【Nコード】

N8894Z

【作者名】

弘悦

【あらすじ】

「赤い人」僕たちはそう呼ばれた。

それは、僕たちの生まれた星、火星への移民が、真つ赤なシーンから始まったから……滅びに向かう地球と過酷な環境で進化する火星、SF童話

「赤い人」僕たちはそう呼ばれた。

それは、僕たちの生まれた星、火星への移民が、真つ赤なシーンから始まったから。

「地球へ来るの？エイコク」

「うん、特別にお願いして、許可をもらった。メロウに逢うためにね」

銀河ネットの端末の中で、地球に住むメロウが、ニッコリと微笑んだ。

僕は、長い間、大おじいさんの部屋に入る事は、許されていなかった。

大おじいさんは、僕のおじいさんの、お父さん。僕が生まれる前に亡くなっている。

お父さんとお母さんがいない日に、僕はこっそり、大おじいさんの部屋に入ってみた。

二階に昇り、部屋の扉を開けると、ホコリと古い本の臭いがする。部屋は、お母さんが時々掃除しているみたいで、きれいになっていた。

部屋の奥には、大きな本だなと、大おじいさんが使っていたと思う、机とイスが置いてあった。僕は、皮のイスに座ってみた。ちよっと大人になった気がする。

「あれこれ？これは何だろう？」

その時、僕は気がついた。机の上に小さな機械が置いてある。

電源を入れてみたが、まったく動く気配がしない。

「うーん、何かの通信のための機械に見えるけど、普段見かけないタイプだなあ」

僕はその機械をコツソリ持ち帰る事にした。修理は、僕には難しうただけど、なんとか、頑張ってみる事にした。部屋に帰って、僕は火星のネットで、大おじいさんの機械を調べてみる。どうやら、大おじいさん時代に、地球と交信に使ったものみたいだ。

“ 銀河ネットへつながる、専用の通信端末。GF 78 ”

「 銀河ネット？なんだろう？ 」

再び火星のネットで調べてみる。そこで僕は、火星の移民の歴史を深く知る事になる。

今から100年前。地球の指導者が一同に集まり、大事な事を決めた。

大きな会場の一段高い場所で、一人の科学者が話をしている。

「 人間が快適に暮らせるように、惑星を改造する、テラフォーミングは、遙か昔のおとぎ話。惑星を改造する力など、人間には持つことは、将来もできないでしょう。かつて、移住に最も適していると思われた金星は、少し前まで、厚い大気を爆弾で、吹き飛ばし、植物を植えるだけで人間が住める、と言われていました。今は、金星が殆ど自転していない、昼も夜も、500度の灼熱の星だと解っています。つまり、金星は地球そっくりな姿でも、人が住む為には、自転させ、さらに、太陽から外に軌道をずらす必要があるわけです。科学が進んだ今でも、そんな事は不可能であるのは、みなさんもおわかりでしょう。」

人間に出来るのは、少しだけ、人が住みやすくする事だけです。

自然をほんのチョットさわる、それでも、莫大な費用と時間が必要になります。

そして、大きな災いが、火星に起こります。

火星にとって、これから私達が行う事は、“破壊”そのものなのです”。

地球の人口が増えすぎ、他の惑星への移住が検討されていた時代。

その第一候補は、火星に決まった。そして僕たちの大おじいさん達

は、100年前に、地球から火星に移住した。まだ、僕は生まれてはいない。僕たちは、火星の四世代目。

僕たちは火星で生まれた、純粹の“火星人”らしい。

100年前に、大おじいさんが見た火星。その地上は炎で覆われていた。

二つの火星の月が、人の手で、地上に落とされたからだ。

ダイモスとフォボス、火星の二つ月が、地上を赤く染め、人が住むための、深く巨大なクレーターを作り出した。

「移住の一番の問題は、火星の気圧が低いこと。地球の気圧の1/100にも満たない。水は蒸発し、人の血液も沸騰します。厚い気密服を着る必要があります。」

そこで、地上から30キロメートルの深さに空洞を空け、私達が住む街を造ります。

その方法は、火星の二つの月を、地上に落す事。初めに、外側のダイモスをヘラス平原へ落下させます。それにより、火星の大きなくぼみ“ヘラス平原”のクレーターの深さは、7キロメートルから、20キロメートルになります。そして、新しく出来たクレーターの中心へ、フォボスを落とします。二つの月の落下により、直径1000キロメートル、深さ30キロメートルのクレーターが出現し、その底では、人間が生活出来る、気圧を得る事ができます。人々は、気密服無しで、行動できるようになります。もちろん酸素マスクは必要ですが。クレーターが冷えるのを待って、地上から30キロメートルのクレーターの底に、火星の都市【エデン】を造ります。水は、火星の南極と北極、あと永久凍土に含まれる事が確認されているので、薄い水を通さない素材でおおい、クレーターに水を溜める地下ダムを造ります。それから、地球との宇宙船の定期便を飛ばす為に、軌道エレベーターを赤道に立てます。実は、軌道エレベーターを造る際に、二つの月が問題になっていました。軌道エレベーターは、無重力に造る必要があります。地球の月は、静止衛星軌道、

つまり引力が無くなる、無重力より先にありますが、火星の月は、火星の重力の内を廻ります。火星では二つの月が、軌道エレベーターにぶつかる、可能性があったのです」

そして、火星への移住計画は実行された。

火星に人が住めるように、人類は、二つの月を火星に落す。地上を焼き、その時から僕たちは「赤い人」と呼ばれた。

「ふう、これでなんとか、動きそうだ」

僕が修復した機械は、やはり通信用の端末で、銀河ネットを経由するらしい。

銀河ネットは100年前に、地球から離れる人々が、いつでも地球と、TV電話やメールをやりとりできるように、太陽系レベルで張られたネットワーク。

100年前は、太陽系を越えて、銀河レベルのネットとなる、予定だったらしい。

でも、移民は僕たちの火星だけで終わり、銀河ネットは使われなくなり、その存在も忘れられていた。僕は修復が終わった端末を動かしてみた。

反応がある！銀河ネットは生きている？

銀河ネットのタイトルが表示され、メニューが出た。ドキドキしてくる僕の心。

“新しい友達をつくる”をメニューから選択してみる。

太陽系の全ての星へ、“友達になろうよ！”のメッセージが一斉に送られる。

僕は、期待と興奮で朝まで、銀河ネットへメッセージを送り続けた。でも、その日は、何度“友達になろうよ！”を送っても、返事は無かった。

それから、二週間の間、僕は毎日、銀河ネットに接続していた。

「あーあ、やっぱり100年前のものだから、誰も使ってないのか

なあ。僕のように、端末を見つける人がいても、いいのになあ」
あきらめかけていた、その時ついに、応答があった。

喜びと期待、それと初めての友達に、不安で僕は、すごく緊張してきた。

「どんな人なんだろう？同じくらいの年なら話しも合うけど……」
回線が繋がった。女の子の姿が端末に映った。

少しカールがかかった緑の長い髪。そして吸い込まれそうな青い瞳。その瞳の色は、僕たちが学校で習った、地球の青の色アースカラーだった。女の子が口を開いた。

「こんにちわ……初めまして。私の名前はメロウです。地球のコロニーに住んでいます」

僕は女の子の吸い込まれそうな、その青いその瞳に、釘付けになっただけだった。

地球と火星は、遠く離れていて、返事に時間がかかる。メールのように、メッセージを送って、相手の答えをしばらく待つ必要がある。笑顔で僕の応答を待っていた、女の子は、小さな唇を開いて、再び僕に質問。僕の返事が想像以上に遅いので、心配になったようだ。

「……あのすみません。聞こえていますか？もしもし？」
やっと、かなしばりが解けて、あわてて返事をする僕。

「あ、あ、はい、良く聞こえています。ぼ、僕は、火星の都市エデンに住んでいます」

ニコリと微笑んで、僕の顔を見たメロウ、地球に住む女の子……え？地球だった？

「ち、地球の人なんですか!？」

まさか、地球に繋がるとは思わなかった……そっか、だから、返事に時間がかかるのか。今頃気づいた僕が驚いていると、その姿がおかしくて、女の子、メロウは声を上げて笑いだした。

「そ、そんなにおかしいかなあ。ちよつと笑いすぎ……」

「こ、ごめんなさい……最近、地球では楽しい事が無くて……フフ」

しばらく笑った後、女の子が、どうしていいか、ちょっと困っている僕に話しかける。

「あのーえーと、ですね……」

「は、はい、なんですか？」

「いちおうメロウに合わせて、笑い顔をつくっていた僕が、ひきつりながら、ぎこちない顔で聞き直す。僕のその様子を見て、メロウがまた、プツと吹き出した。

「フフ、よかったら、あなたの名前も、教えて下さいね！」

「ああ、ごめんなさい！僕の名前は、エイコクです。おじいちゃんが付けてくれました。

昔の日本の言葉で、火星を表す言葉だそうです……」

「フフ、ありがとう、エイコクさん。名前を教えてください。私の名前、メロウは、水に住む妖精の事みたいです」

再びニツコリと笑った、青い瞳の少女。

「エイコクさん、私とフレンドになってくださいね！火星の友達は初めてです！」

その名のとおり、地球の妖精のような姿に、僕はちょっと大げさなOKを出した。

また、端末の向こうでメロウが笑っている。

「そんなにかしいかなあ……僕の話仕方……ちょっとショック」

その日から、学校が終わり、自分の仕事が終わったら、銀河ネットで、青い瞳の女の子に逢う事が、僕の日課になった。

「火星の暮らしは、大変なのでしょう？」

今日も僕は銀河ネットで、宇宙の友達、メロウと話しをしていた。

「うーん、僕はここで生まれたからね。大変かどうかは、良くわからない。ここでの生活が、当たり前だと思っているよ」

「空を見る事もないのでしょうか？地下30キロのクレーターの底って、想像つかないわ」

「まあ、クレーターの底って言っても、人工太陽塔が、光をくれる

からね。一応、昼と夜もあるよ」

「でも、酸素マスクがないと、歩けないのでしょうか？」

「うん、それはしょうがないね。地上にドームを造って、その中を酸素で満たす計画もあったみたいだけど、大量の酸素が必要になるし、事故でドームが壊れたら、被害が大きい。」

でも、酸素マスクはこの100年で、小型で高性能になっているよ。酸素のリサイクル機能もあるから、一週間くらいは持つんだ」

「へえ、その風邪の時に付けるマスクみたいなので、そんなに長い間、呼吸が出来るんだ」

僕の事ばかり聞きたがる、メロウ、地球の友達。その姿は、本当に可愛い。

少しカールがかかった緑の長い髪。そして吸い込まれそうな青い瞳。地球の青の色。

火星は赤い色の星、みんなが、青い地球に憧れている。

メロウの話したと、地球は今、大変らしい。

そして、あまりメロウは、自分の事を話したがらない。火星はこの百年で、科学が発達し、現在では地球を越えるまでになっていた。

それは、僕たちが、地球に頼ることが、出来なくなつたからだつた。僕が生まれる前に、地球では大変な事が起こり、地球の人々は火星の事を忘れてしまった、いや、忘れたのではなく、火星を助けるどころでなくなつたのだ。

僕たちの地下の都市は、大きな問題が起きれば、待っているのは、速やかな死だつた。

火星は、とても寒くて酸素もなく、気圧も低い。人間はそのままでは、数秒も生きていられない。地球からの助けがなくなつてから、火星では、自力で生き延びる為に、都市の整備と改善が、優先して行われてきた。

生き延びる為に、僕たちのおじいちゃん達は、がんばつた。そしてようやく、生活が安定した、お父さんの時代から、子供達には科学

を、学校の他の授業より、優先して教えた。火星では小学生でも、仕事を与えられる。過酷な環境を生き延びる為に、仕事は山ほどあった。子供でも、大人と混ざって、仕事をすることも珍しくない。僕も工場で、パソコンの組み立てを、一日四時間している。メロウは十二歳。僕と同じ年だった。学校には通っていないようだ。

「メロウ、勉強はどうしているの？」

「自宅でコンピューターと両親から、教えてもらっているわ」

「いいなあ、学校へは、行かなくてもいいんだね」

メロウが、悲しそう表情をして、僕を見て首を振る。

「エイコク、私は学校へ行きたいの。一度も行ったことないのよ。

赤い人が羨ましい」

メロウは時々。僕たちのことを“赤い人”と呼ぶ。

地球では、火星人と、呼ぶ人たちもいるらしいが、あまり良い意味ではないらしい。

「赤い人は、小学生でも、仕事を持っているんだね！」

「うん、ここは生きる事が、努力なしでは出来ない場所だからね。

子供の頃から、自分で出来る事は、何でもやるように言われているんだ」

「すごいね、小さい頃から、生きる事を……そうなんだ……」

「そうしないと、ここでは、呼吸さえ出来ないからね」

「地球では、大人達は、いつも暗い顔をしている。生きるための話なんかしないわ」

「うん？それはなんで？」

「もう、地球は……人間は、たそがれをむかえたって……エイコクは意味が解る？」

「たそがれ？夕暮れの事？地球の夕日は綺麗だろうね。ここでは太陽を見る事はないよ。30キロの深いクレーターの底に住んでいるからね。そして地上は赤い砂だけが広がっている……僕は、地球に行ってみたいなあ。青い地球を見てみたい」

再び悲しい顔をして、首をふるメロウ。

「もう、青い地球は無いの。もし、エイコクが地球へ来て、きつとがっかりすると思う」

うつつすらと、涙をためる青い瞳。メロウは悲しそうだ。

「……僕は、がっかりなんかしないよ。それに……」

「それに？」

メロウが、青い大きな瞳で僕を見る。

「青い地球はあるよ……僕には見える」

僕の言葉に不思議そうな顔をしたメロウの、青い瞳の中に、小さく輝く地球を、僕はまぶしそうに見つめていた。

今、地球は、世界に十二のコロニーがあり、二億の人々が住んでいるらしい。

増えすぎた人間は、疲労した地球から、火星を初めに、大規模な移民を計画した。

しかし、人は、人間という種は、地球を離れる事が出来ないと、すぐに解る。

火星に飛び立った人々のように、使命感を感じ、宇宙に出る事が出来る人々は、実は非常に少数だったのだ。多くの人間は地球から、独り立ち出来なかった。

いつまでも、空と海と緑と空気が、当たり前に与えられると思っていた。

地球に抱っこされないと生きてはいけない、小さな子供だった。

宇宙への移民には賛成でも、自分以外の誰かが、地球を離れてくれれば、それでよいと、願っていただけだった。そして、火星への移民がスタートして二十年がたった時に、その考えは、火星に落した月「恐怖」^{ダイモス}と「混乱」^{フォボス}を地球の人々にもたらした。

火星に移住し、巨大クレーターの30キロメートルの底で暮らす、移民の三世代目、僕たちのお父さんの世代に、身体の変化が現れた。重力が地球の1/3で、気圧が1/100以下、酸素は殆どない二酸化炭素の多い火星。この砂の星は、想像より早く、火星の地球人

を、火星に適応させようとしていた。

身長が高くなり、手足が長く伸び、耳はとんがり、そして肌は真っ白に変化する。

僕たち四世代目は、その特徴がますます強くなり、火星への順応が進んだ。

小学校の僕でも、身長は190センチメートル、真っ白な肌と、砂から目を守る、魚のような透明な膜を持つようになった。メロウは小説のエルフに似て、カツコよいと言ってくれたが、当時の地球の人は違っていた。

僕たちは変化を、有るべき姿“進化”と呼んだが、地球から、独り立ち出来ない人々はそうは思わなかった。火星に適応する為に、懸命に生きる僕達の、急速に変わっていく姿を見て「恐怖」と「混乱」を地球の人たちが持つてしまう。宇宙に出ることは、つまり、人で無くなる事であり、僕たちを奇妙で恐ろしい、怪物に思ってしまった。

「もう、地球から出ることはできない。出れば恐ろしい怪物になるだけだ」

地球の人々は、宇宙に絶望した。そして生き残るために、限られた食料や燃料の奪い合いを始める。今度は「疑い」が、人の心に住み着き、戦いに歯止めをかけられない。

ついに大昔に造られた、核爆弾を使用した戦争まで、争いは発展してしまう。

封印されたはずの核爆弾が大量に使われた。世界中のみんなが嫌い、無くなったはずの核爆弾は、こっそりと隠されていた。150億を越えていた人口は、一年で半分以下になり、放射能の影響で、森は枯れ水も腐り、地上に人が住む事が出来なくなった。

その後50年で、地球の人口は10億人まで減り続ける。

破壊された自然は、元に戻る為には、数千年もの時が必要だった。

地球に住む人々は、コロニーの中だけで、生きるしかなくなり、文

化も科学も、気力さえも無くし、ただ“終わり”を待つようになってしまう。

そして、地球からの助けは無くなり、宇宙船が来る事もなくなった。火星は、地球から、完全に孤立した星となる。皮肉なことに、地球からの助けが、まったくなくなつた火星は、生き残るために、科学技術が地球を越えて、発展していく。

過酷な環境と、いつ、なにが、終わりをもたらすか、解らない不安。僕たちは、大人も子供も関係なく、お互いの協力を、生まれたときから必要とされた。

僕たちは懸命に勉強して、少しでも、安心して暮らせるように、みんなががんばってきた。そして、今から10年前に、軌道エレベーターを完成させる。

火星の無重力空間まで伸びる、軌道エレベーターは、宇宙空間へ人や物を大量に、費用をあまりかけずに、上げる事が出来る。そして地球へ向かう為に、巨大な宇宙船の建造が開始された。宇宙に捨てて置かれた、火星への移民の為に使用された、宇宙船が大幅に改造され、地球へ向かう準備が始まった。

地球へ向かう準備が進む中、僕たちの間で、本当に地球に戻るべきか、話し合いが何度も、開かれた。理屈では、もはや滅ぼうとしている、地球に帰るメリットはない。

話し合いの結論は、「地球へ帰る力は、火星の発展の為に使うべきだった。」

でも、理屈ではそうであっても、みんなの心には、理屈ではない気持ちだが、どんどん大きくなっていく。それは“帰巢本能”自分のふるさとに帰りたい、と願う心だった。

僕たちは初めて、生きるためではなく、心のために、大きなムダをすることを決める。

理屈や効率を捨てて、感情で行動する事を決めたのだ。

そして、その思いは、どんどん加速していく。わずか二年で、地球への大型宇宙船は完成間近までできていた。推進用のエンジンは最新

の火星の核融合を使用している。

火星に移住する時は、一年以上かかった、宇宙の旅の時間は、2ヶ月まで短縮される。

二百人の乗組員が選抜され、厳しい訓練を受けていた。そして来年、あと一年で、地球への旅が始まる。TVに写される、建造中の巨大な宇宙船を見ながら、僕は決心した。

「地球へ行きたいだつて？」

僕は、学校の先生に、地球行きの宇宙船に、乗りたい事を告げた。

「エイコク、何を言っている！？おまえが考えるより、危険が多い旅だぞ。しかも得るものは、無いかもしいない。地球は汚染され、地球の人々と、逢えるかどうかさえ分らない」

僕はためらったが、はっきりした理由が無ければ、宇宙船には乗せてもらえないだろう。

今までの事を先生に全て話した。大おじいちゃんの部屋で、端末を見つけた事。それを修理して、銀河ネットに繋ぎ、地球の女の子と話をしている事を。

「地球の女の子と、毎日会話している？」

先生は驚いて、しばらく考え事をしていたが、マイコンを取り出し、どこかに電話をかけた。マイコンは、手のひらに収まる、携帯電話とパソコンの機能を持ったもので、酸素マスクの故障など、命に関わる事も含め、この都市エデンのサービスを誰でも利用できる。

「……ええ、やっぱりそうですよね、あり得ない話です。でも、ウソをつくような子ではありません……はい、解りました」

先生は宇宙船の開発を行っている、宇宙省の知り合いに、僕の事を話してくれた。

そして、直接僕を、宇宙省の科学者の所へ、連れていく事になったらしい。

僕たちの街から、科学者がいる宇宙センターまでは、大型の火星用の電気自動車で移動する。電気自動車は、火星の悪路にも耐えられ

るように、頑丈に造られた四輪駆動車。かつて地球から送られた、火星探査車の名前から“スピリット”と呼ばれている。

科学が進んでも、空気が薄い火星では、空を移動するのが難しい。今でも自動車は、火星では重要な交通手段だ。かなりのスピードで、宇宙センターを目指すスピリット。

数時間で入り口に着いた。先生が、入館の手続きをしてくれている間、辺りを見渡していた僕が、一つのモニターに釘付けになった。軌道エレベーターからの画像だった。

10年前に完成した、無重力の空間へ伸びる、それを、僕は初めて間近で見た。

軌道エレベーターの先に、銀色に光る機体が見える、それは大型の宇宙船。

もっとよく見ようとモニターに近づいた時に、先生が僕の名を呼んだ。

奥の小さい部屋で待っていた、科学者は概要を聞いていたが、僕の言葉で、先生と同じように驚いていた。

「銀河ネットが生きている？……しかも地球と通信が出来るとは……これは、まだ発表されていないが、去年から地球との連絡が取れなくなっていた。私たちは、地球の人達は、滅亡した可能性が高いと判断していた」

その言葉には僕も驚き、そして否定する。

「昨日も話しました！生きています。地球の人々は、僕の友達、メロウは生きています」

ふう、とため息をつく科学者。

「もし、それが本当でも、地球へは行けない……」

「え、何故ですか？」

「先週のエデンの会議で、地球行きは中止に決まった」

夜遅くなって家に戻ってきた僕は、疲れてはいたけど、メロウの事が気になった。

部屋に行ってみると、端末がない！慌てて下の階に降りる。

「お母さん、僕の部屋の端末を見なかった？」

お母さんは振り返り、心配そうな顔をする。

「夕方、宇宙省の方が見えて、エイコクの部屋に入って、端末を持っていったわ」

「なんで？お母さん、止めてくれなかったの？」

「宇宙省の方の言うことに、反対なんか出来ないでしょう？だいたいエイコク、あれは、大おじいちゃんの部屋にあったもの。あなた、勝手に部屋に入って、持ち出したの？」

僕には返す言葉がなかった。

(もう、青い地球を宿した瞳には、逢えないのだろうか……)

一週間後、突然、僕は宇宙省へ呼び出された。

先生に急いで行くように言われ、午後からの授業と仕事はやめて、今度は一人で、スピリットに乗り、宇宙センターに行く事になった。火星の自動車は、十二歳から運転できる。まあ、運転といっても、コンピューターが全て行うので、地球のバスみたいに、行き先を伝えるだけだけど。火星で一人、必ず一つ与えられる、マイコンを取りだして、僕はスピリット(自動車)を呼び出した。十分ほどで、スピリットは僕を迎えに来てくれた。

それに乗り込み、マイコンで、行き先を、スピリットに伝える。

宇宙センターの入り口で、この前逢った、科学者が待っていてくれた。

奥の部屋で椅子に座った僕に、科学者は、静かに話しかけてきた。

「君は地球に行きたいと、学校で先生に言ったらしいね」

「はい、言いました。地球へ行きたいと、一生懸命お願いしました」

「それは、地球の友達に逢うためだね？」

黙って頷いた僕を見た科学者は、僕に意外な質問をしてきた。

「そうか……今でも、その気持ちは変わってないかな？」

僕には、科学者の質問が、よく解らなかった。地球と連絡が取れなくなつて、地球への宇宙船の出発は、無くなつたと聞いていたからだ。

「もう、地球への宇宙船が飛ぶことはない。計画は中止になつたと聞きましたけど」

僕の言葉にうなずいて、科学者が説明してくれた。

「君の直した通信端末を調べてみた。その結果は驚くべきものだった。100年前に造られた銀河ネットは今でも生きており、数台残つた通信端末は使用可能だった。地球との会話が可能だと君の言つた事は、真実だったようだね。そしてこの事実は、火星の方針を変えた。地球へ行くことが、決定されたのだよ」

驚いている僕を見て、科学者がニコリと笑つた。

「君の直した、銀河ネットの端末が、地球への道を再び開いたんだよ」

僕は、一番気になつていゝ事を聞いた。

「地球の女の子とは、メロウとは話せたのですか？」

「うん、話すことは出来た。ただ彼女は、私達にはあまり好意的ではなかつた。ほとんど地球のことは話してくれない。こちらの計画を伝えると、地球に来るのは、やめてほしいと言つていた」

「それは何故ですか？何でそんな事を……」

「理由は教えてくれなかつた。だが、とても懸命にお願いをしていたよ。地球には、来て欲しくないよね」

僕はショックを受けた。僕はメロウに嫌われたのだろうか。もしかして、もともと友達では無かつたのか？僕の様子を心配そうに見ていた科学者は、いたわるように話しかける。

「大丈夫かい？たぶん彼女は混乱しているのだろう。なにせ、ここ50年以上、地球と火星は交流が無いのだから。だが、地球の人々が生きていゝ事が解つた。地球への旅は実行される。そして君は、

特別にそのメンバーに選ばれた。どうする？行くかね？遙かなるふるさとへ……地球への旅に」

僕は、すぐに大きく頷いた。

（行けるんだ、地球に！メロウに逢える！）

通信端末は、返してもらえなかったが、研究所で使用する許可がおりた。

でも何度呼び出しても、メロウは、僕の呼びかけに、答えることは無かった。

不安と寂しさが僕の胸をギュツとつかむ。でも、地球への道は開かれた、後戻りは出来ない。僕は期待と不安の中で、特別な訓練を受け、その時を待った。

そして一年後。

僕たちは軌道エレベーターを使って、無重力の空間を目指す。大きなエレベーターの扉が開いた。一度に200人が乗れる大きな部屋。シートベルトを付けるように指示があり、焦って急にベルトを引き出した為に、僕の席だけロックが出来なくなって、真っ赤になった僕の姿に、みんなが笑い、少し僕も緊張が取れた。

パシユン、扉が閉じて、高速でエレベーターが上昇を始めた。

一気に静止軌道（無重力）まで上昇する。スウウと速度が遅くなり、エレベーターが軌道エレベーターの発着ステーションに到着した、その瞬間、フワアと身体が浮く感覚……無重力を感じた僕。全員がシートベルトをしたまま、緊張して次の指示を待つ。

エレベーターのスピーカーから、落ち着いた女の人の声が聞こえた。「みなさん、ここまでお疲れ様でした、私は、この軌道エレベーターの管理責任者です。」

ここからは、みなさんが自分達の力で進む事になります。でも、心配はいりません。私達「赤い人」は、いつも全員で協力してきました。そして、いつも問題をクリアしてきました。だから、今度も必ず、全員の協力と個人の努力で、この長い旅は必ず成功します。

さあ、静かに、立ち上がってください。地球への道はここから始まります」

いくつかの確認を行い、宇宙服に着替える僕たち。科学が進んだとはいえ、宇宙は真つ黒な死の空間には変わりはない。僕たちを守る宇宙服は、今でも、かさばり動きづらいものだった。また無重力での着替えも、地上で訓練したとはいえ、もたつく僕は、みんなを待たせてしまった。あせる僕に、となりの男の人が、笑いながらジェスチャーで“ゆっくりでいいよ”と伝えてきた。周りの人達も同じく、ゆっくりでいいと伝えてくる。

男の人が、宇宙服のヘルメットを、指でコンコンと叩いているに、やっとな気がつく。

「あつ」と僕は呟き、音声会話のスイッチをONにした。

「焦る事はないよ。みんな初めてなんだ。そして君は一番この中で若い。すぐに宇宙に慣れて、今度は、私達を助けてくれるようになるさ」

周りの人が、僕を助けてくれて、予定のスケジュールを遅らせる事なく、着替えはすんだ。

宇宙服に着替えた僕たちは、最後のエレベーターを昇って、軌道エレベーターの最上部のデッキに出る。眼下には、赤い光を放つ、僕たちのふるさどが見える。

そして、上を見上げた僕は、「うああ」と大きな声を出す。周りからもため息が聞こえた。そこには真つ黒な宇宙が果てしなく広がって、瞬かない星々が、今まで見た事もない数で、美しく輝いている。宇宙の中に飛び込んだ僕は、その空間に一人で立っているように思え、美しさをこえて、怖い感覚を覚える。震える僕の肩を、さっきの男の人が軽く叩いた。

振り向く僕に、男の人は、ある方向を指さす。その場の全員が、その指さす方向に気がつき、僕と同じようにその方向を向いた。全員が見た方向に、銀色に輝く巨大な宇宙船があった。大おじいさん達が、希望を持ち、危険と長い時間を乗り越えて、この星に来た時に

乗っていた宇宙船。中身が全て新しくなり、その外見も綺麗に塗り替えられていた。

銀色の外装に、赤い円と青い円が重なった、マークが描かれている。それは火星と地球をシンボルにしたもの。地球から火星へ、そして今度は火星から地球へ、その100年の想いが込められている。しばらく、だまつて宇宙船を見ていた僕。

宇宙は広く神秘的で怖い。でも、きつとやれる、地球へ行き、メロウに逢うんだ。

デッキに、固定されている宇宙船へのシャトルの、入り口が開いた。誘導に従い、船内に乗り込むと、すぐに離陸するシャトル。シャトルの窓から真っ黒な宇宙に、巨大な銀色の宇宙船が見えてきた。だんだんと、銀色の宇宙船が近づいてくる。間近に見えるとその巨大さに圧倒される。宇宙から見ればちっぽけな物かもしれない。でも、僕たちの努力と、夢と希望が詰まっている、それを造った、僕たちの力に、僕は素直に感動した。

シャトルが、宇宙船の横に並び、通路が結ばれる。順番に、そのチューブ式の通路を渡り、宇宙船の内部に移動する僕たち。全員の乗船が終わった時、ハッチが閉じて、宇宙船とシャトルの通路が外れる。離れていくシャトル。船内に再び軌道エレベーターの管理者の声が響く。

「みなさん、行ってらっしゃい。順調なフライトを願っています」
薄暗かった宇宙船の内部に灯りが点り、この船の船長からの初めての指示があった。

「みなさん、宇宙船“オデッセイ”にようこそ。私はこの宇宙船の艦長です。フライトは、いつ急な危険が迫るか解りません。緊急時は私の指示に従うようお願いします。それから、今回の地球への旅の計画は、地球の人達の生存の確認が取れなかった為に、一度中止されました。しかし、一人の少年により、地球との交信が行われ、地球の人の生存が確認され、再びこの壮大な計画が動きました。その少年もこの宇宙船に乗り、地球を目指します。力を合わせて、必

「ずこの旅を成功させましょう。そして、少年の想いも、一緒に叶えたいと思っています」

二百名の「赤い人」を乗せて、旅立ちを待つ銀色の宇宙船。核融合エンジン四機が動き始め、微かな振動を感じる、移住スペースの小さな窓から、青いパルスが輝くのが見える。

多くの人が、一番大きな窓がある、展望スペースに集まっていた。小さくなっていく火星。僕たちの遙かなる、地球への旅が始まった。

宇宙船は順調に飛行を続けて、六十二日後に、地球の軌道上にのった。

望遠で見る地球の地上は、火星と同じ色をしていた。動く影はなく、宇宙船からのスキャンでも、人間は発見できなかった。

二ヶ月間の宇宙の旅の途中で、僕はメロウに多くのメッセージを送った。

“ ついに火星を出発したよ。これから君の居る地球を目指すんだ ”

“ メロウ、返事して欲しい。何か地球に問題があったの？心配だよ ”

“ 僕が、何か気に入らない事を言ってしまったら、謝るよ。どうか返事をして欲しい ”

“ 小さく地球が見えてきた。もうすぐ君に逢える……逢えるといいなあ ”

“ メロウ、地球に着いたよ、宇宙船は地上には降りられないから、シャトルの準備をしている。僕が地球に来たのは間違いだったのかな…… ”

“ もう、僕と逢いたくないなら、それでもいい。でも無事でいるなら返事だけして欲しい ”

メロウから返事は無かった。

やはり地球の人々は、滅んでしまったのだろうか？地上の調査のために、シャトルが地球へ降下する。強化スーツを着て、僕たちは地上に降りた。

地球の重力に耐えるために、身体の動きをサポートするモーターを

備え、放射能を避ける、背が高い僕たちが着るスーツは、2メートルを軽く越えていた。その姿はまるで、SFの宇宙から来た、ロボットのように見える。地上の調査から一週間が経った。地球の人は結局、発見出来なかった。上空の宇宙船と連絡をとり、今後の事が話し合われた。

その結論は「火星へ帰る」だった。

今日で、地球とも、お別れになる。火星のように砂漠化した地球の大地に風が吹く。

青く美しかった地球。多くの動物が住み、僕が立つこの場所にも植物が茂り、緑の風が吹いていたのだろう。なぜ、人間は、自分で責任がとれない事を、平気でしてしまうのだろう。その責任は、自分ではなく、地球の全ての生き物に、そのツケは未来の自分の子供達が、背負う事を忘れるのだろうか。核爆弾が造られた時“自分達が持つていないと不安”だと核爆弾を造る国が次々と現れた。そして、世界を何百回も滅ぼす程の、核爆弾が作られた。文化と科学が進み、その存在は、負の遺産として、封印された筈だった。進んだ文化と科学は、太陽の光から電気を、水素から核融合で熱を得るようになった。

爆弾ではなく、人のために核は有効に平和のために使われた。

そして、地球はエネルギー問題を解決し、高い技術は長く多くの人生を生かした。

文化も進み、人の心は、成長したと思われた。でも、核爆弾は残っていた。

“他の国は、捨てたと言っているが、実はどこかに隠しているのでは？”

その思いをみんな持っていたのだ。密かに、隠された核兵器は「疑い」により生き延び「恐れ」により使われてしまった。星は一つの生き物。相手を殺す毒は、自分にもまわり、結局全てが死ぬ。闇に怯え、猛獣に襲われ、人間が必死で生きていた頃、今の火星で生き

る、僕たちのように“生き延びる”事だけを考えていた。それを忘れ、多くの人を殺して、そして自分達の未来さえ、殺してしまった地球の人々。いつか「赤い人」も責任を取れない事を、起こしてしまふのだろうか……何も無い大地に風が恐ろしい音を立てた……地球の海辺に立つ僕は、飽きることなく夕日を見ていた。

核兵器により、南極や北極、氷河の全ての氷が溶けた地球は、海面が上昇して、かつて巨大な都市があったはずの、この場所も、海へと沈めてしまった。

それはまるで、神様が人間の愚かな行為を、隠したように思えた。波が打ち寄せる音を聞きながら、僕は、銀河ネットの端末を傍らに置き、電源を入れた。これが最後の通信だった。フレンドへの送信画面を選択する。メロウの名前を選んだ。

この場所で僕が待っていることを、一時間以上、メロウに呼びかけ続けた。

でも、メロウからの返事は無かった。

もう明日には、火星に帰る準備が始まる。僕も宇宙船に帰るしかない。

ふう、とため息をつき、僕は青い海の彼方を見つめる。僕は泣いていた、涙がたくさん出た。悲しかった。寂しかった。宇宙には、僕たち以外、人間はもういない。涙が止まらない。強化スーツのヘルメットを外し、僕は両手で、目を押えて泣き続ける、涙は海へ落ちて、すぐに消えていく。チャポン、近くで水の跳ねる音がした。

「悲しいの？……エイコク」

その声は、僕が待ちわびていた、あの声だった。顔を上げるとすぐそこに、少しカールがかかった緑の長い髪。そして吸い込まれそうな、青い瞳が僕を見ていた。

「メロウ……君なの？」

コックリとうなずくメロウ。顔だけを海の中から出して、僕を見ている。海中に漂う緑色の髪はとても綺麗だった。

「ごめんね、エイコク。私は、自分の姿を、あなたに見られたくない。

かった。だから、あなたの呼びかけに応えなかったの」

メロウの身体は、青く輝き、手には水かきと、水中で呼吸するエラをもっていた。

地球の人々は、進化したのだ。水中で生き延びるために。そう僕たちと同じ様に。

「でも、あなたが宇宙船から毎日送ってくれたメッセージを見て、私は後悔した。だから、返事を送ろうとしたの。でも赤い人、あなた達が、巨大な宇宙船で地球に降りて来て、奇妙な姿で地上を歩き回るのを見て、地球の人々は、恐怖したの。地球を奪われるのではないかと……そして、あなた達から隠れる事に決まった。あなたへの返事は禁止されたの」

僕はメロウの言葉に驚き、大きく首を振り、誤解だとジェスチャーする。

「違うよ！僕たちは、ふるさとに帰ってきたかったんだ。そして、自分の100年前に別れた、兄弟達と逢って、話したかっただけなんだ。奇妙な格好も、僕たちが地球の重力に耐える為に、必要だった。解って欲しい、僕たちは、その為に2億3千万キロメートルを旅してきたんだ！」

僕は、メロウに懸命に話した。解ってほしかった。メロウだけには、解って欲しかった。

火星の人々は、寂しかったのだと、懸命に生きてきたのだと。そして僕は、君に会いに来たんだと。メロウは、僕の言葉を黙って聞いていた。

「うん、解るよ、エイコク。私、あなたに逢ってはダメだと言われた。返事したらダメだと。でも、私、やっぱり逢いたかった……」
そう言うとメロウは、静かに僕の手をとった。

「メロウ？」
強化スーツの手を握る、小さな手。動きが止まった僕に、メロウは微笑みかけた。

「さあ、行きましょう。私の住む本当の地球へ。私も待っていた……」

「あなたをずっと待っていたの」

その青い瞳から涙が落ちる。僕はそれを見て、自分のスーツを脱ぎ始めた。

メロウと同じ色の、青い海を、彼女が住む世界、今の地球を見るために。

海中の成分調査では、地上より浄化が進んでおり、人体への影響は無いと報告されていた。

全ての安全装置とラッチを外して、海中へ入る準備をする。この時間は、地上の紫外線も少ないが、それでも僕の身体には刺激が強すぎる。一応、身体には有害な物を弾く、防塵クリームを塗ってあるが、急ぐ必要がある、早く海中へ。

火星の弱い重力に慣れた僕には、地球の地上の重量は、うめき声が出るほどに重く、苦しいものだった。火星と宇宙船で、重量への対応トレーニングを受けていたが、火星の3倍もの重力は、まさに僕の身体を押しつぶした。

少しずつ苦痛と、重力に逆らいながら、僕は海を目指す。海の水が届かない場所に強化スーツを置き、ほんの10メートルくらいの距離を、普段の何倍もの時間をかけて、膝をつき、四つん這いで進むでもどんなに苦しくても、僕の歩みが止まる事は無かった。そこに友達が待っている。手のひらをひろげたメロウがいてくれる。

海中に入った僕は、地上の重力から解放された。その瞬間地球の海の景色が、飛び込んでくる。オレンジ色に輝く太陽の光が、海の中を微かに照らす。ゆらめく景色、透き通る青い水。

「なんて、綺麗なんだ……これが地球の海……そして……これが地球の青い色」

僕は、海が初めてなのに、その青さは、なぜかとっても懐かしかった。

また泣きそうになった僕を見て、横で笑うメロウ。

「なぜ泣くの？エイコク」

“そうだね”とうなずく僕に、メロウは泳ぎ方を教えてくれた。少

々ぎこちない僕の泳ぐ姿に、笑い出すメロウ。僕もその笑い顔を見て一緒に笑った。

水の中の呼吸は、火星で使っている、酸素マスクが問題なく使えた。太陽が沈み、暗闇に閉ざされた、海中を泳ぐ二人。

初めての海の中、だんだんと暗くなる。もう視界が効かない、でも僕は怖くなかった。

メロウが手を繋いでいてくれる。横を見ればメロウが、青い瞳で僕を見ていてくれる。

遠くに光が見えてきた……透明な、お椀を伏せたような巨大なドーム。

その中に町並みが見える。

「これが、君の生まれた街……そして君が生きる場所なんだね……」
うなずいて、その青い瞳を閉じたメロウ。

「そうよ……ここで生きていくの。いつか地上へ戻れる事を信じて、人間は再び海に帰ったのよ」

メロウの涙が海中に流れた。

その意味は今でも僕には解らない。

初めての地球の海。

青い瞳の地球の友達が手を伸ばして、僕を待っていた。

青い海の中で、僕らは初めて触れあった。

この先、地球に来る事は難しいかもしれない。

でも、不可能じゃない。

それは、未来は僕たちが造るから。

そして、僕には宇宙の友達そらともだち、ソラトモがいるから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8894z/>

ソラトモ

2011年12月27日23時51分発行